

第18回企画展

朝鮮陶磁シリーズ-12

「李朝水滴展」

前期：昭和63年4月12日(水)～7月10日(日)

後期：昭和63年7月12日(水)～10月2日(日)

会場：当館企画展示室

■「李朝水滴展」

開催中の「李朝水滴展」(前・後期に分け、10月2日迄。展示点数170点)は、連日多くの陶磁専門家、愛陶家、一般ファン等を迎え、好評の裡に推移している。ここに同展出品の水滴について、若干のインフォメーションを記す。

器形の名称について、儒者・文人等の詩文には水滴のことを「現滴」と表現しているが、図No1(後期展示)では「五萬年硯水器」の銘文が把手に陰刻されている。李朝後期には、硯水器とも呼ばれていたことが窺える。容量について、図No2(通期展示)は、高さ12.8センチ、径19.4センチ、重量1.82キログラムで、水を入れると重量が3.02キログラムとなる。従って、容量は1,200ccで今日知られる水滴の中では最大級の作品。半面、図No3は高さ1.2センチ、径2.0センチ、重量10.4グラム、容量2.2ccで、極々小さい作例。この水滴は、本来女性の化粧用の水入れで、粉水器と呼ばれていたもの。しかし、注口に墨の付着した作例があり、水滴としても利用されていた事が判明している。図No4は、筆立と水滴を兼ねた作例。透彫りの箱の中に蹲踞の姿勢で太った蛙が配され、水はその胎内に溜まり、玄武神(亀)の下に取付けられた小亀の口から水が出るようになっている。一方、上部には八個の穴があり、そこは筆が差せるようになっている。粉青沙器の水滴(図No5)には、注口の穴があるだけで、水が入らないのではと疑問に思われる方がいるかも知れないが、この手の作品は底に穴があり、その穴は胴の半まで通し、一種の管状になっており、一旦中に水が入ると出ないようにしている。この方式は、高麗陶磁の影響と思われる。(K)



図No1 黒釉珠紋字入直取水滴

図No2 青花磁砂 高麗製楕円八角形水滴

図No3 青花花文丸形水滴

図No4 高麗製 花文透彫り蛙型筆立

図No5 粉青沙器の珠紋文 玉珠形水滴

お知らせ

第18回講演会を下記の如く開催致します。

日時：昭和63年7月2日(土)
午後1時半～午後3時半
(受付は午後1時より開始します。)

場所：大阪弁護士会館・6階人会議室
講師及び演題は未定です。決まり次第お知らせ致します。

※講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証はお忘れなく御持参下さい。講演会当日に継続の中込みをされる方は、美術館受付でお申出下さい。



編集後記

7月からの新しい会員証は唐三彩の豪華な壺です。緑釉、褐釉、白釉が流れ滲んでもし出す趣きをお楽しみ下さい。なお、7月は継続手続が集中する時期で、会員証の発送が遅れがちになります。新しい会員証が届くまでは、郵便局の領収書がその代りとなりますので、大切に保管していただきますよう、お願い致します。(O)

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.12

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏⑨

昨秋、当館の開館5周年を記念して開催した「李朝陶磁500年の美」展は好評を博し、各地を巡回することになり、4月29日から約1ヶ月は、福岡県立美術館で開催されました。当館の館蔵品が大量に館外に出たのは、これが初めてです。当館以外の会場で展示する時は、陶磁用の展示ケースを備えているところが少ないので、新しく臨時の特設ケースを作りつけなければなりません。絵画展示ケースをそのまま転用すると、作品が小さく見えてしまうのです。そのためには会場に何度か足を運び、会場の広さ、展示室の構成、天井の高さ、柱や出入口、非常口の位置、電気の配線や容量、会場の雰囲気などを十分考慮して平面プランを作成します。その場合、展示品の年代別、技法別、器形別の分類展示をどうするか、すなわち、どのような順序で、どのような作品の組み合わせで展示するか、床の間に当る重点展示ケースの位置を、どこに持ってくるか、観客の誘導をどのようにするか、などが問題になります。展示品の写真をごく小さく縮小して、平面プランの図面に置いて、ああでもない、こうでもないを検討していくのです。次は会場全体と、個々のケースに貼る紙の色の決定です。特殊紙を使うことが多いので、折角決めた色が、品切れやら、色見本と違っていたりすることがあり、また選び直さなければならぬこともあります。こうしたことは、すべて何も具体的なケースが出来ていない前に考えることですから、頭の中の想像だけで事を運んでいかねばなりません。よほど想像力をうまく働かせないと、出来上ると散漫な会場になってしまいます。しかし、思い描いた通りの会場の施工が出来ると、そこに展示品を飾りつけ、ライトをつけて落ち着いた雰囲気がかもしだされると、その時やっと、長い間の苦労が一時に癒され、学芸員冥利を感じるようになるのです。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 伊藤郁太郎

館蔵品の紹介

文化財保護委員会は、わが国に現存する建造物、彫刻、工芸品、古文書などの中から学術的価値の高いもの、美術的に優秀なもの、文化的意義の深いものを選んで重要文化財に、なかでも世界的視野に立って冠絶しているものを国宝にそれぞれ指定している。現在、工芸品の内で、中国と朝鮮陶磁に限定すれば、指定物件は国宝9点、重文94点となっており、国宝と重文の割合はおおよそ1対9で、指定物件10点の内1点が国宝ということになる。ここに館蔵品から国宝、重文の作品各2点を紹介する。

1. 油滴天目茶碗 (国宝) 南宋時代(Fig.1)

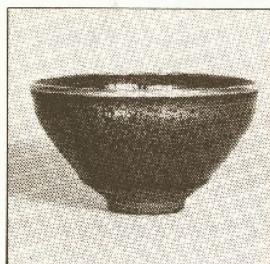


Fig.1 油滴天目茶碗 (国宝)

漆黒の釉面に銀色に輝く斑文が、あたかも水面に油が散っているかのように見えるところから、古来よりこの手の作品を「油滴」と呼び習わしてきた。中国では、これを「滴珠」(明初の『格古要論』に記載)と呼んでいる。油滴の発生は、器表に鉄分を多く含んだ釉薬を厚くかけているので、焼成中に素地や釉薬から出るガスが抜けきらないで表面に気泡を作り、含有の鉄分がそこに流れ込み、窯が冷える過程で鉄分が油を落したような美しい結晶になるために起こる現象といわれている。但し釉薬が薄い口縁や、見込みの鏡部分と高台際の釉薬の厚いところでは、この現象は見られない。油滴天目茶碗は、日本だけに伝来しているようで、すぐれた道品はごく少ない。この茶碗は、油滴が内外全面にびっしりと粒をそろえて出ており、とくに内面の茶せんずれ付近では青味を帯びて美しく輝いている。油滴の輝きと姿の美しさから「油滴中の油滴」と称され、昔から第一等に数えられている名品。口縁に純金の覆輪がめぐらされ、荘重さをいや増している。伝来は、蘭白秀次が所持し、西本願寺、京都六角の三井家、若狭酒井家へと伝わったもの。茶の産地、福建省建窯の産。

2. 飛青磁花生 (国宝) 南宋~元時代(Fig.2)

青磁釉の下に、鉄斑文を飛ばしている青磁を日本では「飛青磁」と呼び、古来よりとくに茶人が珍重してきた。太からず、細からずの下無形の胴に、わずかに開いた小さな口、ほどよい大きさの高台を付けた姿は、まことにバランスがとれ美しい曲線を見せている。玉露春。形の瓶と呼ばれ、元時代に流行した器形の一つ。釉色は、南宋時代の粉青色をした砧青磁と違って、少し黄味が増す青磁一いゆる天龍寺手と呼ばれるグループに近いが、その光沢のある艶やかな釉調は、しっとりとした絶妙な味わいを示し、この作品の声価を高からしめている。器

表面に散らされた21個の鉄斑文は、その鉄錆色が黄味を帯びた緑地に映えて美しい景色となっている。高台の曇付ぎわに見える赤い帯は、焼成中に露胎部の鉄分が発色したもので、通例に見られる天龍寺手の赭紅色よりも濃く、この瓶に一層の魅力を添えている。流麗端正な形と幽邃な釉色は完璧で、ただただ名品としかいえない。大阪鴻池家に伝来したもの。類品は、日本(重文)、英国のヴィクトリア・アルバート美術館(Fig.3)とスイスのパウアー・コレクションの三点が知られる。浙江省龍泉窯の産。

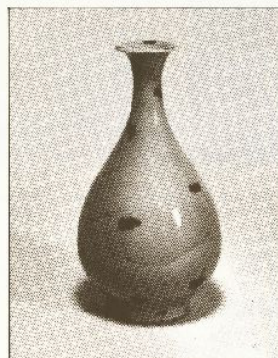


Fig.2 飛青磁花生 (国宝)

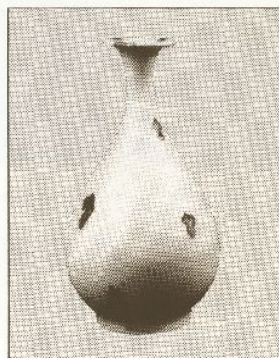


Fig.3 飛青磁花生 ビクトリア&アルバート美術館蔵

3. 白磁刻花蓮花文洗 (重文) 北宋時代(Fig.4)

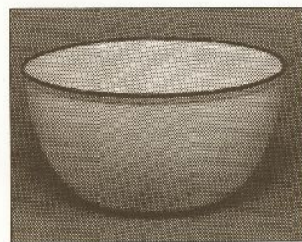


Fig.4 白磁刻花蓮花文洗 (重文)

宋代の窯場は、唐代と違って全国に散在し百花撩乱の如く各地に名窯が生れた。中でも官窯、哥窯、汝(官)窯、定窯、鈞窯の五大名窯が有名で、これらを称して「官・哥・汝・定・鈞」と言う。定窯は北京から南西約60キロの河北省にあり、釉質が象牙のようにクリームがかっているため「アイボリー・ホワイต์」と呼ばれる白磁を焼成した窯として有名。また、この窯は、昭和16年4月に日本の陶磁学者・小山富士夫氏が窯址を初めて調査し、実体を明らかにした窯として知られている。腰の深いこの鉢は、器壁が薄く手取りは大きさに比して軽い。(高台も薄く低く、重量の軽減が図られている)。文様は器の内外面によどみのない流麗な刻線で、大きくゆったりと蓮花文が見事に表わされているが、1.5~2ミリしかない器壁を思えば、陶工の技の冴えに驚かされる。また、胴から胴裾にかけて六本の刻線で絞りが入れられているが、それによる歪も器形には全く見られず端正な姿を見せている。この様に洗練された器形は、北宋時代の知識人の嗜好を反映したものであろうが、宋代陶工の技術水準の高さを示すもので、まさに「神品」の名に相応しい作品である。定窯では薄作りを追求する結果、この鉢のように口縁部の釉を拭き取り、伏せて焼く方法(中国では「覆焼」という)がとられ

た。焼成後、口縁部のザラ付を押さえるために金属製の覆輪(カバー)を被せている。黒くなった銀の覆輪が、冴白色の釉肌と調和し美しいハーモニーを奏でている。

4. 青花花鳥文盤 (重文) 明・永楽時代(Fig.5)



Fig.5 青花花鳥文盤 (重文)



Fig.6 青花花鳥文盤

白磁の釉下にコバルトで絵付した磁器を青花といい(日本では「染付」と呼ぶ)、元時代の後半(14世紀初)には生産が始められたと思われる。白地の素地にコバルトを顔料(絵具)として文様を描き、その上に透明釉をかけて高高度で焼き上げると、白地に鮮やかな青の文様が浮かびあがる。青花は、明代後半から多く生産され始める五彩(赤・黄・緑等で絵付した磁器。赤絵ともいう)とともに明代の陶磁の主流を占め、江西省景德鎮窯を中心に焼成された。径が50.5センチの輪花形の大盤。この様な大形器は、元時代に始まり、明前期(洪武~宣徳)にかけて最高潮に達する。見込には、大小13個の実をつけたピワの枝に、その実をついばむ一羽の尾長鳥が配され、白い素地を背景に生き生きと写実風に美事に仕上げられている。元代の青花の絵付は、全面を幾層かに分け、その間にびっしりと繁縷をいわず描きつめるというのが特徴であったが、明代になるとこの作品のように余白を残して描写する方向に変化する。このことは遊牧民族と漢民族の嗜好の差異を表わしているようで面白い。従文様として、十六に区割りした側面にそれぞれ、桃・柘榴・苹果(リンゴ)・荔枝等の折枝文を配し、口縁には宝相華唐草文をめぐらしている。果物は、ピワを始めいずれも実の沢山なるもの、沢山の種子を包含する瑞果吉祥文で、尾長鳥も瑞鳥であり、文様すべてが吉祥をあらわす図様となっている。この様な文様構成は、明代の工芸職匠によくみられるもので、子孫繁栄、不老長寿、富貴長命等を象徴し、人々の現世での生活の幸福を願う気持ちが込められている。明初期の青花を代表する作品。類品として、当館に1点(Fig.8)中国・故宮と天津博物館に各1点の計3点が現在知られている。因に、4点とも同形同図であるが詳細を見ると、幹の根本に近い葉が2か3枚である点が違うだけで、本作品が2枚で、他の作品すべて3枚となっている。

(K)